

クオリアの疑わしさについて

篠原成彦

キーワード：物理主義 心 主観性 クオリア ウィトゲンシュタイン

1. 当人の内観によってのみアクセスできる体験の主観的側面……？

初学者に「クオリアって何ですか？」と尋ねられた哲学教師が言うことといえば、だいたいこんなところだろう。

指先に棘が刺さったり、赤い夕日を見たり、納豆に鼻先を近づけてクンクンやったり、あるいは誰かの言動にカチーンときたりしたとき、あなたは、そのときならではの感じを持ちますよね。そうした感じは、当人が内観することによってのみアクセスできる体験の主観的な側面です。体験のこうした側面を哲学者たちはクオリアと呼んでいるんです。我々に意識があるということの核心は、まさにこのクオリアがあるってことなんですよ。[人によっては、このあとに「……なーんてことがよく言われてるんですけど、実際のところ、どうなんですかねえ」などと言い添える。]

たったこれだけの説明で納得してしまう人も少なくない。けれどもやはり、キョトンとしてしまう人もけっこういるものだ。後者に接すると、実のところ私は内心、察しの悪い人だなあ、と思ってしまう。

などと言うと、私自身がクオリアの存在を当然のことと考えていると思われそうだが、実はそうではない。私は、クオリアに或る種のリアリティ（実在性ではなく、いわば実在感）を覚えつつも、この概念を疑いの眼差しで見えてきた。どこがそんなに疑わしいのか。「当人が内観することによってのみアクセスできる体験の主観的な側面」という上記の標準的な特徴づけが、である。「客観的探究の対象にならないのなら、そんなものは研究の領域から追い出してしまえ」などと乱暴なことを言いたいわけではない。この標準的な特徴づけは或る種の杜撰な思考に立脚しているのではないだろうか、と言いたいのだ。

そうした可能性に最初に気づかせてくれたのは、おそらくご多分にもれず、私にとってもウィトゲンシュタインだった。加えて、デネットの仕事も私の疑いを勇気づけている。ここでは、この両者からその考察の一部を取り出し、それに対する私の所見を述べつつ、クオリアという概念の疑わしさを示したいと思う。

2. 『探Q』第I部246～253節

いまさら言うようなことでもないが、ウィトゲンシュタインの著作は実に読みづらい。議論がどう進んでいるのかが掴みにくく、ときに話題がいきなり変わったように見えて、実は変わっていません。私はこれから、『哲学探究』——以下『探究』と略——の諸節を自分はこんなふうにした、という話をしたいのだが、読みづらい各節を逐一引用しては解釈を記してゆくというスタイルでは、話が長くなるうえに私の注目している論点がぼやけてしまいそうなので、ここではそれを採りたくない。けれども、各節の内容とそれらの繋がりを、私がどう解釈したかということは、やはり明らかにしておきたい。そこで考えたのが、ウィトゲンシュタインによく似た哲学者による『探究』と同じ（と私に思われる）話運びの著作を捏造してしまう、という策である。これを、シノゲンシュタインの『探Q』と呼ぶことにしよう。シノゲンシュタインは、ウィトゲンシュタインに比べるとかなり軽薄だが、くどくどと説明することを厭わない。また、唐突な話の切り出し方で読者を悩ませるようなこともしない。『探Q』においては、どの節も、議論の狙いと前後の繋がりがよく分かるように書かれている。にかかわらず、『探Q』の各節は、『探究』における同じ番号の節に内容の上で対応している（と私は思っている）。つまり、たとえば『探Q』第I部249節は、『探究』第I部249節を私がどのように解釈したかを示しているのである。

ここで御覧いただきたいのは、『探Q』第I部246～253節である。『探究』の対応する箇所は、一般に「私的言語論」と称されるブロックの入り口に位置し、その後¹に感覚体験を記述する私的な言語の不可能性を本格的に論じているとされる諸節が続いている。つまり、246～253節は私的言語論のハイライトというべき部分ではない。にもかかわらず私がこの箇所を取りあげるのは、感覚体験には当人のみ²が知りうる面があるということは決して自明視できないということが、そこで明らかにされていると思われるからである。それでは、以下『探Q』から引用していこう。

246 「私に痛みが生じていることは、私だけが知りうるのであって、他人はそれを推察しうるのみだ」なんて言う人がいる。だけど、他人は私が感じているのが痛みだ³ってことを——通常の「知る」の意味において——知ってしまう。その点では、この言い方には虚偽が含まれている。いっぽう、ここにはナンセンスな面もある。すなわち、「知る」という語が全くその用をなしていない。だって、「私に痛みが生じているのを私は知っている」⁴ってことが、「私に痛みが生じている」⁵ってことと、事柄としてどう違うのか、君、説明できるかい？

それから、「他人は私の振る舞いを通じてのみ私に痛みが生じていることを理解する」⁶っていうのもナンセンスだ。だって、まるで他人でなければ——私自身なら——もっといいやり方でそれを理解できるということを暗に前提しているから¹。

他人が私について、「彼には痛みが生じているのだろうか？」と疑う、ということ

¹ Cf. Hacker, P.M.S. (1993) *Wittgenstein : Meaning and Mind, Part II : Exegesis* §§ 243-472, p.31.

は意味をなす。だけど、「私には痛みが生じているのだろうか?」と私が疑う、という^{avowal}ことは意味をなさない。そしてもちろんこれは、自分に痛みが生じたことを我々は常に知ってしまう、ということじゃない。「知る」という言葉は、間違ったり疑ったりすることが可能な場合にのみ適用できるんだ。

247 ただし、「私に痛みが生じていることは、私だけが知りうる」っていう言い方は、「知る」っていう言葉を不適切に使いつつも、言語ゲームの或る規則を(不器用に)示唆してるとは言えるね。たとえば、人が「私の意図はこういうこと(だった)んだ」と真面目に言うとき、その発言には特別の権威というか、動かし難さがあるでしょ? つまり、発話者がまともで正直な人とみなされている限り、他人がこの種の発言を疑う^{avowal}ってことは意味をなさない。で、このことが、「本人だけが自分の意図を特権的に知っている」なんてふうに言われちゃうんだ。ここでの「知っている」は、「疑いの可能性が言語規則において排除されている」ということを不器用に(場違いな言葉で)示唆しているわけだね。

248 そう、自分の意図についての発言と同様に、痛み等さまざまな感覚についての^{avowal}本気の表白にも、他人は疑いを差し挟めない。感覚が私的だと言えるのは、一つにはまさに、この意味において、だ。つまり、「感覚は私的だ」「私だけが自分が感じているのは痛みだということを知りうる」っていう表現は、何よりも、「本人の本気の表白に疑いを差し挟むべからず」という、我々の言語ゲームにおける規則の曖昧な言いかえとして理解されるべきなんだよ。

249 おや、どうやら君、感覚体験の本気の表現は疑われえない^{avowal}ってことを、信用できないみたいだねえ。じゃあ、乳児の笑顔について考えみようじゃないか。あれを見ると、人はためらいなく、この子は気持ちいいんだな、と思うよね。ほんとに気持ち悪いんじゃないか、などとは決して思わないよね。嘘をつくという言語ゲームを学んでいない乳児については、我々はまさに疑いを差し挟まない、ということさ。嘘をつける人間についてのみ、我々は感覚体験の表現について疑うことができるんだ。

250 なんなら、乳児に加えて、犬についても考えてみるといい。我々が犬による痛みの振る舞いに疑いを差し挟むことなんて、ありうる?……ありえないねえ。疑う^{avowal}ってことが成り立つには大がかりなお膳立てがいるんだよ。

251 さて、さっきも言ったように、「私に痛みが生じていることは、私だけが知りうる」^{avowal}っていうのは、言語ゲームの規則のヘタクソな言い換えだ。何らかの事態を述べてるわけじゃない。つまり、これは経験命題じゃない。

納得いかない? たしかに、言語規則の表現は、しばしばバツと見じゃ経験命題と区別がつかないから無理もない。だけど両者の違いは、述べられていることを映像化してみようとする^{avowal}と分かる。みんな気づいてないかもしれないけど、一般に、映像で或

る事態を表現できるのは、逆の事態も映像化できるからだ*。で、言語規則を述べる文については、明らかに逆の映像が作れない。それはとりもなおさず、その当の文が述べる事柄も映像化できないってことだ。たとえば、「どの棒にも長さがある」という文について考えてみよう。棒はもちろん描ける。だけど、棒が長さを備えているさまなんてものは描けない。このことは、棒が長さを備えていないさまを描けないってことと表裏一体だ。そして、それを描けないってことは、棒には長さがあるってことを我々は一つの事態として見るができない（経験できない）ってこと、つまりこれは事態じゃないってことにはかならない。

※ この点について説明しよう。ある国に旅した私が、その国では車が左側を走っているという事態を友人に伝えるべく、街の大通りをスケッチして送った、という状況を想定してほしい。ただし、私はその絵にコメントを添えておくのを忘れていたとしよう。絵を受けとった友人は、いろんなことを思うだろう。交通量の多い街だなあ、とか、歩道が無くて危険だなあ、とか。だけど、私が伝えたかったのは車が左を走ってるってことなんだと、確信をもって結論することは友人にはできない。すなわち、一枚の絵からはいろんなことが見てとられるけれど、その絵によってどんな事態の表現が意図されているのかをその絵だけから割り出すことはできないんだよ。

けれども、車が左側を走っている大通りの絵に対比されるものとして、全く同じ大通りを車が右側通行している絵が持ち出されれば、どちらの絵についても、どんな事態を描こうとしたものであるかが判明する。つまり、一般に絵というものは、逆の事態の絵——実際にそれが持ち出されはしないとしてもね——との対比によって、或る事態の絵たりうるんだ。

252 ちょっと補足しとこう。いま述べたことから分かるように、「この物体は延長している」と主張しようとする人がいたら、我々は「ナンセンス！」と言うほかない。だけど、「あらゆる物体は延長している」という言語規則の表現を、或る事態を記述する全称命題と受け取っちゃうと、「この物体は延長している」という文は、そこからの論理的帰結に見えちゃうかもね。

253 さて、感覚体験に関する当人の特権的な知なるものについては、「他人は私と同じ感覚体験を持つことができない、だから、私の感覚体験には決して他人に知られない面がある」という推論を含むかたちで主張されることもあるね。だけど私の考えでは、「知る」の用法に関する先の論点を度外視するとしても、この主張は間違ってるんだよ。——説明しよう。

まず、他人も私と何らかの点で同じ痛みを感じてるってことは、ごく普通に言える。痛む箇所が同等だったり、原因が同等だったり、いろんな点で「同じ」だってね。シャム双生児は、全く同じとき、同じ場所に痛みを感じることもさもあるかもしれない。痛んでいる場所と時間まで同じだってこともあるだろう。だから、こう問いをたてよう——そんなときのシャム双生児たちの痛みについてさえ同じではない（違っている）と言える面って、いったいどういう面だろう？

目下の場合、明らかなのは、とにかくここには二人の——すなわち別個の——感覚の担い手がいる、ということだ。じゃあ、感覚の担い手が異なれば何が感じられているかについても違いが生じうる、と言えるだろうか？それってどういう違い？

そう、「感覚の担い手が異なれば必ず感覚トークンが異なる」²とは言えるね。(ここでは、「感覚」という語を、「何らかの感覚が生起している状態」の省略的表現と考えてほしい。以下についても同様だ。) 言いかえれば、「或る感覚トークンが複数の人にまたがって生起することはありえない」ってことだ。でもこのこと自体からは、感覚における或る面が他人には伝達できない、といったことは引き出せない。引き出せるのはせいぜい、我々は他人に自分の感覚体験をしばしば隠しておけるってことだ。そう、感覚における或る面の伝達可能性じゃなくて、感覚が生起していることの隠蔽可能性だね。君が隠しさえしなければ、他人は君に生じている感覚について容易に何かを知ってしまう。そして、そうやって他人が知りうること以外の何かが感覚体験にはあるなんてことは、「感覚の担い手が異なれば必ず感覚トークンが異なる」ってことから、けっして導けないんだ*。

そういえば、自分の胸をドンと叩いて、「ほら、これは他人には感じられないんだ! 分かるだろう?」って言った人がいたなあ。彼としてはそうすることで、彼にそのとき生じた感覚と他人が自分の胸をドンとやったときの感覚との間にある重要な違いを示唆できているつもりだったんだろう。でも実際には、せいぜい、「感覚の担い手が異なれば必ず感覚トークンが異なる」(或る感覚トークンが複数の人にまたがって生起することはない) ってことしか言えてなかったんだ。そしてそこからは、他人に知られえない面が感覚にあるなんてことは導けない。——もっとも、私がこのことを彼に告げていたら、彼はきっと、「いや、私が示唆したかったのは、そういうこととは全く違う!」と書いていただろう。彼はおそらく、私が「私的言語」と呼ぶところのものの可能性を信じていたに違いない。そしてまた、他人の私的言語の語彙がその意味を獲得する構造を、我々は理解できると信じていたに違いない。

※ 念のために、以下のことも付け加えておこうか。「感覚トークンは複数の人にまたがらない」ということに加えて、もしも、「感覚の担い手が異なれば必ず感覚のタイプも実質的に異なる」って言えるとしたら、公共言語では決して伝えられない面が個々人の感覚体験にはある、ってことになるだろう。でも明らかにこれは無理だ。たとえば二枚の鉄板があるとき、「異なる鉄板が温度の担い手である以上、両者の温度は必ずタイプを異にする」って言うとしたらどう? 間違いじゃないけど実質を欠いてるよね。なぜって、これは結局、トークンの違いを特殊なタイプの違いに——必ずたった1つのトークンがそこに属するタイプの間の違いに——格上げしてみせてるだけだから³。

さて、以上の引用から、「私の感覚体験には、私が特別な仕方でも知り、かつ他人には、それを知る手だてのない特有の側面がある」という(私に言わせれば)疑わしい見解に直接関係する論点を拾い上げ、それらを繋ぎ合わせることで、次のような議論が得られる。

² むろん、ウィトゲンシュタインは感覚のタイプ/トークンという概念を用いていない。彼が採っているのは、物的な対象の異同とそれらが持つ性質の異同の関係を、感覚の場合にあてがう、というやり方であり、そこで述べられているのは、概ね、私と他人の痛みの異同を語る観点はいろいろがあるが、私と他人が別人だという理由で「私のこれと同じものは他人には感じられない」と述べることは意味をなさないということである。タイプ/トークンという概念を用いたシノゲンシュタインの説明は、これを私(篠原)が敷衍したものだと考えていただきたい。

Cf. Wittgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigation*, Basil Blackwell, I-§ 253.

感覚体験についての一人称言明が揺るがしがたいのは、言語ゲームの規則としてそうになっているからであって、感覚体験を持つ本人がそれについて特別な仕方を知っているという事態が成立しているからではない。なぜならそもそも、或る感覚体験のさなかにある人が、自分にその感覚体験が生じているのを「知る」ということは、この語の用法からしてありえないからだ。或る人が痛み等の感覚体験のさなかにあることを通常用語法において「知る」のは、むしろ他人である。

けれども、しばしば、「他人は私と同じ感覚体験を持つことができない、それゆえ、私の感覚体験には、私だけが特権的に知り、決して他人に知られえない面がある」と主張される。この主張は、「知る」の用法に関する上記の問題をおくとしても、大いに疑わしい。たしかに、感覚の担い手が異なれば必ず感覚のトークンが異なるとは言えるが、感覚体験には他人に知られえない面があるということは、そこから導けないのである。

つまりこの議論は、我々は自身の感覚体験に関して特別な知識を持つと主張する人々に対して、

- ・「自分の感覚体験がどんなものかを、あなた自身が知る、というのはナンセンスじゃないか？」
- ・「言っとくけど、『他人は私と同じ感覚体験を持つことができない』ってことから『私の感覚体験には決して他人に知られえない面がある』ってことは導けないよ」

と釘を刺すものになっている。私は本稿の冒頭で、クオリアを説明する際の「本人が内観することによってのみアクセスできる体験の主観的な側面」という標準的な言い回しは、或る種の杜撰な思考に立脚している可能性がある、と述べた。まずは、これら二本の‘釘’を見送ってしまったまま（あるいは黙殺して）考えを進めてしまうことが、私の言う「杜撰な思考」に属する。

もちろん、どちらの‘釘’についても反論はありうる。とりわけ、後者について、シノゲンシュタインは話をはぐらかしている、と反発したくなる向きは少なくあるまい⁴。そうした人は、たぶん次のように言うだろう——「そもそも、『他人が私と同じ感覚体験を持つことはない』ということで私が言おうとしたのは、私が感じているこれを、他人がいわば覗き見することはありえない、ということなんだ。そのぐらい君だって分かってるはずじゃないか。だがこれは結局、253節に登場する‘胸ドン男’の言い分にはほかならない。それゆえシノ

³ 言い方を換えれば、「性質の担い手の違いを性質における違いに格上げしている」ということである (Cf. Hacker, op.cit. p.48.)。なお厳密に言えば、性質の担い手が違うときは、しばしば単なる担い手の違い以上の何らかの違いがその性質に加わってくる。たとえば、私の胃と厳密に等しい機能的性質を持つ臓器は、解剖学的には見分けがつかないほど私とそっくりの人物の胃以外にないだろう。しかし性質による区別は、或る程度の差を乗り越えてなされることにその眼目がある。感覚についてもそれは例外ではない。

⁴ ウィトゲンシュタイン本人の発言も、こうした反発を招くだろう。Cf. Wittgenstein, op. cit. I-§ 253.

ゲンシュタインは、まずはすました顔でこう応じるだろう——「ああ、分かってるとも。君はまさに、担い手が異なれば感覚トークンも異なる、感覚体験は複数の人にまたがらない、って言ってるわけさ」。この応答は、無理解を装って強引に話題をすり替えているように感じられるかもしれないが、そうではない。‘胸ドン男’の口にした「これ」が、公共言語における直示的な表現として、あるいは何らかの確定記述への置換によって、周囲の人々に理解可能なものであるとする限りは、こう応じるのがもっともであり、またそうするほかないのである。

もっとも、こう言われたところで‘胸ドン男’とその支持者たち——併せて‘胸ドン派’と呼ぼう——は簡単に引き下がりはしないだろう。彼らは、「私を感じているこれ」に替えて「この、私の感覚の主観的な側面」といった表現を用いることで、自分たちが言おうとしていることと、シンゲンシュタインの言っていることとの違いをはっきりさせようとするに違いない。

だがこれに対しては、まず「その場合『主観的』ってどういうこと？」と問い返すことができる。「内観的」、あるいは（哲学者特有の用法における）「現象的」、さらには「意識における」といった言葉で説明しようとしたところで、おそらく相互に定義しあうような状態になってしまおう⁵。

そこで‘胸ドン派’は、「他人は私と同じ感覚体験を持つことができない」ということから「私の感覚体験には、私だけが知り、決して他人には知られえない面がある」ということを導きだそうとしたのが、そもそもの間違いだった、と考えるようになるかもしれない。すなわち、「私の感覚には、私だけが『これ』として指示し理解することのできる面が、端的な事実としてあるのだ」と言うべきだった、と。

しかし、‘胸ドン派’がそうした見解を正当化したいなら、彼らには、いわゆる私的言語の可能性を立証することが求められる。なぜなら、この見解が正しいなら、当人が内観することによってのみ「これ」として指示される或る特徴が把握されなければならず、それが把握されうるならば、内観的な直示的定義⁶による命名（これが私的言語における語彙の生成だ）もなされうるはずだからである。そして、上記の引用に続く『探Q』の諸節は——というより、周知のとおり『探究』の相当箇所は——そうした命名行為の不可能性を論じるものにはかならない⁷。

3. 変化盲とクオリア

さて、「当人が内観することによってのみアクセスできる体験の主観的な側面」という標準的なクオリアの特徴づけには、クオリア認知における——内観によるとされるがゆえの——いわゆる一人称の権威（すなわち、一人称言明の訂正不可能性）と、内観によってアクセスされる何かとしてのクオリアの自存性が含意されている。後に見るとおり、この二つの面の間には、明らかな緊張がある。デネットは、「変化盲（change blindness）」と呼ばれる現象のデ

⁵ Dennett, D. (2005) *Sweet Dreams*, The MIT Press, Bradford Books, p.79.

⁶ Cf. Wittgenstein, op.cit. I-§ 258.

⁷ その効力がどの程度のものであるかについては、稿を改めて論じることとしたい。

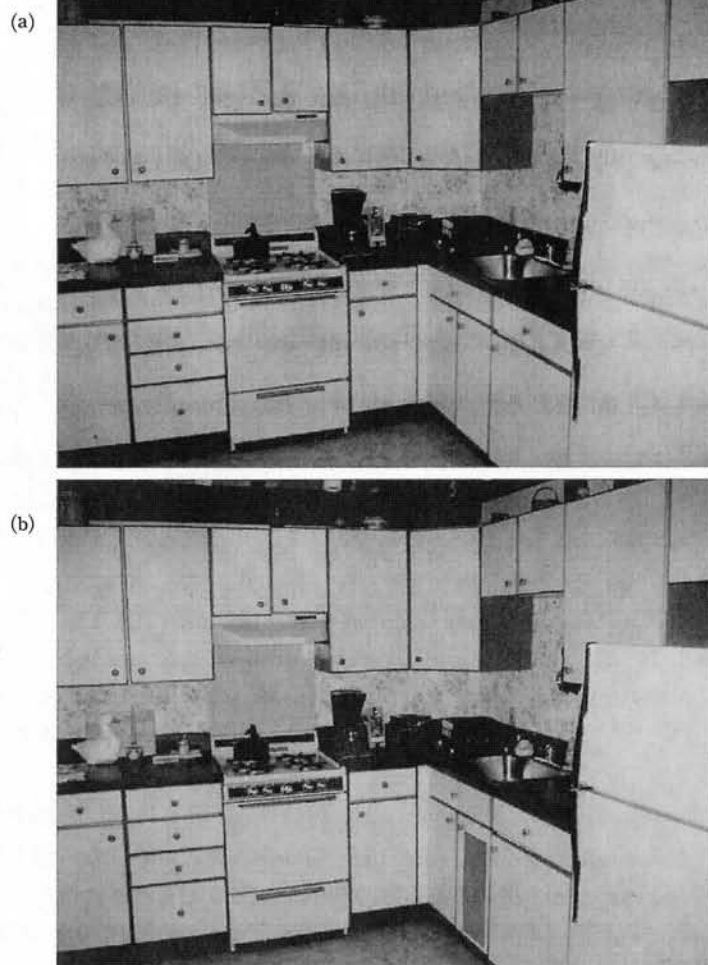


図1

モンストレーションを考察に用いることで、この緊張を孕んだ特徴づけこそが、クオリアという概念を維持しがたいものになっているということを、鮮やかに示してみせている。以下、それを概観することにして。

変化盲のデモンストレーションには、ほとんど同じだが一箇所だけ色の違う一対の写真が用いられる。図1がデネットの用いたものだ⁸。被験者を兼ねた聴衆はスクリーンを前にしており、そこにまず写真(a)が一瞬(4分の1秒)現れる。スクリーンに映像が無いほぼ同等の瞬間がそれに続いた後、今度は(b)がやはり一瞬現れる。あとは同様に、映像なし→写真(a)→映像なし→写真(b)……と繰り返される。聴衆はこの映像の繰り返しをじっと見ているのだが、写真が変化していること(2枚の違った写真を交互に見せられていること)にはなかなか気づかない。

⁸ Dennett, op.cit. p.84.

さて、写真の変化に気づかない聴衆に対して、デネットは「ほら、この色がさっきからずっと入れ替わってたんですよ」と告げる。ひとたびこう言われると、聴衆は一転して、色の変化をその度ごとに見てとるようになる。そこで彼は、聴衆にこう質問する。

ところで、あのパネルの色は変化するんだということがあなたに分かる前も、その領域に対応するあなたの色クオリアは変化していたんでしょうか。…… [略] ……その主観性、その「第一人称のアクセシビリティ」がクオリアの定義的な属性の一つである以上、たぶん誰も、あなたよりこの問いへの答えをよく知ってははいない——あるいは知りえない——はずですよ。さあ、お答えは？あなたのクオリアは変化してたんですか、それとも変化しなかったんですか？⁹

この質問に対して「変化していた」と回答することは、本人に気づかれることのない、しかし微細でも緩慢でもない変化がクオリアに生じうる、と認めることにほかならない。これはとりもなおさず、クオリアに関する一人称言明は他人によって訂正されうる、ということだ。クオリアを知ることに関する一人称の権威がここでは放棄されている。客観的な、言い換えれば三人称的な科学的手段によって、本人が気づかないうちに生じているクオリアにおける変化を、本人が気づく変化と同様に探知できるようになる可能性が、ここでは容認されることになるのである¹⁰。

一人称の権威を保持したければ、「映像における変化が私に分かるまで、私のクオリアは変化していなかった」と回答すべきだろう。だがデネットによれば、この回答は、「クオリアの生起とそれへの本人の判断が常に一致するのなら、クオリアなんて、感覚に関する本人の判断ないし気づきに依存して生起が認定される論理的構成物だと考えたってかまわないんじゃないか？」という疑念を招く。すなわち、クオリアは本来的な性質ではないということになりかねない。そしてもしそうになると、自身の感覚について判断するいわゆる（哲学的）ゾンビについても——クオリアを欠くというその定義にもかかわらず！——論理的構成物としてのクオリアの生起が認定されることとなり、したがって我々はゾンビではないと確信する理由も無くなってしまう¹¹。

デネットの問いに対しては、「私のクオリアが変化したのかしなかったのか、私には分からない」という答えも出てくる。こう答える人の中には、「これまで私は、『クオリア』という語で自分が何を意味しているのか、実は分かってなかったんですね」と認める人もいる。しかし、そうは認めない人もいる。後者に属する人が、もしさらに、三人称的観点に対して一人称的観点が本質的に優るとなおも主張するとしたら、その人はクオリアを、一人称的観点における（すなわち体験による）把捉と三人称的観点からの科学的探査のいずれをも超越するもの、すなわち、あらゆる経験的探究の埒外にあるものとみなしていることになる¹²。

要するに、デネットの質問に対して、「色の変化に気づかなかった間も、私のクオリアに

⁹ Dennett op.cit. p.83.

¹⁰ Cf. Dennett op.cit. p.85.

¹¹ Cf. Dennett op.cit. p.86.

¹² Cf. Dennett op.cit. pp.86-87, pp.90-91.

は変化があった」と答える人も「変化はなかった」と答える人も、また「わからない」と答える人も、「当人が内観することによってのみアクセスできる体験の主観的な側面」というクオリアの標準的な特徴づけに、疑わしさを認めざるをえなくなる、というわけである。うーん、鮮やか！

もっとも、私の見るところ、デネットの議論の核となっているアイディアは、意外にシンプルなものだ。すなわち、一人称の権威を徹底して認めるなら、クオリアに自存性を認めるいわれが分からなくなり、クオリアに自存性を認めるなら、その認知に一人称の権威を認めるいわれが分からなくなる、ということがそれである。つまり本章の冒頭に述べたとおり、そもそも緊張関係にある自存性と一人称の権威をクオリアに認める標準的な理解こそが、クオリア概念を窮地に立たせるのである。前節で私は、人がクオリアの存在を簡単に認めてしまう際の杜撰な思考を二つ挙げたが、ここで三つ目として、上記の緊張関係を見逃してしまう（あるいは黙殺している）、ということが挙げられる。

ただし、上記はあくまでもクオリアの自存性と一人称の権威との間にある緊張関係であって、調停不可能性ではない。同様に、デネットの議論は、クオリア概念の疑わしさを示すものであって、その不整合性を示すものではない。先に引用した彼の問いに「私のクオリアは変化していた」と答えた人は、クオリアに関して第一人称の権威を放棄し、また第三人称的な探究の可能性を承認することになるだろうが、とにかく何らかの意味におけるクオリアの存在を主張することは許容されているし、しかも新しいそのクオリア概念は、当人の内観という独特なアクセスのなされ方がクオリアをクオリアたらしめているという直観と矛盾しないかもしれない。また、「私のクオリアに変化はなかった」と答えて第一人称の権威を堅持する人は、クオリアの生起はいわば「見なし事実」¹³へと陳腐化してしまうのではないかという疑惑に晒されはするが、クオリアの自存性についての直観を放棄せざるをえないというわけではない。さらに、クオリアを自ら経験的探究の埒外に置くことをよしとしてしまう人——そんな人がいるとしたら、の話だが——もまた、クオリアなるものがあるという直観の放棄を迫られてはいない。

けれども、そうした彼らの直観は正しかったということが、まさに直観に訴える以外の仕方では示されない限り、オッカムの剃刀を尊ぶ我々懐疑派としては納得のしようがないのである。

¹³ この表現は、柴田から拝借したものである。次を参照：柴田正良『ロボットの心—七つの哲学物語』、2001、講談社現代新書、pp.50-54。ただし、柴田は「見なし事実」という語に「ホンモノの事実には及ばない」という、私がここで込めている含みを与えてはいない。